

広瀬大志詩集

『草虫観』

REVIEW

川村龍俊

詩集を編み生む仕事は、所収するところの詩行を書いていた過去の自分と対決し勝利することだが、広瀬氏はその次元では詩集を上梓しないしできない。モノとしての音楽への愛があまりに深みに達しているから。氏は詩集をLPレコードのように、選曲・AB面を意識した配列・ジャケットデザイン・紙質・活字の形に至るまで、楽曲以外の全要素にも読者の満足度を最大限に考慮した配慮を尽くし、数十年後に中古屋で手にする今はまだ生まれていない若者をも魅了することを視野に入れ、彼らの所有欲を満たす形で世に問う。

二〇一〇年十月に発行(奥付は八月)された百頁にも満たぬこの真つ赤な本

思潮社

22000円+税



を読了するのに震災を跨いで二年かかったのは何故か。一目見渡して、神に選ばれし者のみが読むことを許されたあの本、全体を読み切ることが超絶に困難な故か誰もが良さげな断片を切り取って読んだことにしているあの本に思えてならなかったからか。血の聖書。私はこの本をそう名付けて鞆に入れたまま、福島で放射能と戦いながら、通読できる日待っていた。

遂に通読が叶った今、初めて手にしたときに聖書を連想した自分の直感にあらためて同期した。各個の死を詩と転じ、その積み上げをもって詩集と成した広瀬氏の視点は、自らの思いを何もかも結晶させて有を生むための無の位置に座す世界の創造者のモノに他ならない。既にある世界に生まれた者が草虫のごとき寿命を遙かに超え、文字によって継がれる人間社会の盛衰の期間をも凌駕してその滅びが終わる更にその後までを書き上げている、震災前に書かれた震災後の書。文体の持つ読者を突き放す冷たさと世界を俯瞰した読後体験に深い溜息と高揚感。再読必須。一気に。